

古代の終止形の名残り

現代日本語の動詞・形容詞では、古代にあったような終止形が失われ、連体形がとって代った結果、終止・連体が同形になって

いることは周知の事実である。これは文字で見たところでははっきりしない四段活用の動詞にも平行的に起ったことは、そのアクセントを見ることよって知られる。たまたま石川県大聖寺市方言のように、ユク（行く）・オス（押す）と名義抄と同じに言う例もあるが、こういう地方では、他の「牛」「風」「蚊が」などの語も○型に言うところを見ると、○型√○型という規則的な型の変化を起したことが知られ、やはり、現在の形は昔の連体形の後身と見られる。

ところで、伊豆利島の方言に見られる次のような例はおもしろい。前項にあげた例の中で行コソーロというのがあったが、この行コは「行く」という動詞の一つの活用形で、次のようにこの方言の終止法・連体法に広く用いられている。

(1) 終止法 行コヤ（＝行くか） 行コナー（＝行くね）

(2) 連体法 行コ人（＝行く人） 行コヨーダ（＝行く様だ）

それでは中央語のような行クという形は用いられないかという点、これはきわめて稀に用いられる。私がかろうじて探し出した用法は次の三例であった。

(3) 行クベ（＝行くべ） 行クナ（＝Don't go）

行クノーガ（＝行くだろう）

ここで考え合せられるのは、上代東歌に見える語法で、「降ろ雪」「這ほ豆」のようなオ段語尾の連体形である。かつて、北条忠雄氏は、八丈島の方言に東歌の語法の名残りを多く指摘されたが、利島の語法は、種々の点で八丈島に通う点がある。思うに利島の行コと行クの対立は東歌の連体形と終止形との別を伝えている

るもので、ただし、他の方言同様ここでも連体形の侵食が烈しく、センテンスのともにも古い連体形が使われるに至ったので、右の行コナーのような例が存在している。しかし、「ナ」「ベキ」「ナン」のような古く終止形についた助動詞・動詞を使う時にはいまだに古い終止形が用いられている。それが右の③の三例ではないだろうか。行クノーガのノーは東歌に出てくる推量の助動詞、「潮満つなむか」の「なむ」の後身だと思う。

服部博士は、「アクセントと方言」の中で高知方言の行クナノ行クはそのアクセントから見ても古い時代の終止形がそこに残っていると断じられた。古い連体形が終止形をほろぼしてしまったというものの、稀にもとの終止形が何かの形で残っている例がぼつぼつあるようだ。

(金田一春彦)